

人間らしく生きたい

高齢加算復活求め署名・宣伝

「国民の生活水準を引き上げるためにも生活保護の年齢加算復活を」。生存権裁判を支援する全国連絡会（井上英夫会長）は26日、東京・新宿駅前

で署名・宣伝行動をしました。同会の前田美津恵事務局長はマイクを握り、全国で80人以上の

高齢者が年齢加算復活を求めて立ち上がっていることを紹介。その上で、「生活保護基準はそのままの制度の『ものさし』になっている。生活保護基準の引き下げの動きを自分自身に関わるものとしてとらえて」と署名に応じるよう訴えました。

東京生存権裁判の元

原告横井邦雄さん(84)は白杖を使って参加。

「国は生活保護の利用者が増加したことを問題視するが、政治の貧困がもたらした結果だ。利用者の責任ではない」と強調しました。

保団連の上沢雄三さん(34)は「憲法は、誰もが人間らしく生きる権利があることを定めている」と指摘。

「生活保護は恩恵ではない」と述べました。

「手渡されたチラシに『人間らしく生きたい』とあったから」と署名に応じた目黒区の原田京子さん(70)。

「いまの社会はあまりにもひどすぎる。人間を捨てるようなひどい政治を変えたい」と話しました。

宣伝するそばも知人と待ち合わせをしていた愛媛県の女性は「大切なことだから」と

横断幕をいっしょに掲げる一幕もありました。